

C年大斎節第4主日 ルカ15章11―32節

【直訳】

11 だが彼は言った、

「ある人が 持っていた 二人の 息子を。

12 そして 言った 彼らのうちのより若い者が 父に、

『父よ、あなたは与えなさい 私に 財産の分け前となる部分を』

だが彼は 分配した 彼らに 資産を。

13 そして 多くない日々の後に

集めて すべてのものを

より若い 息子は 離れて行った 遠い地方の中へ

そして そこで 彼はまき散らした 彼の財産を

生きながら 生きる可能性もなく。

14 だが使い果たして 彼は すべてのものを

起こった 強力な飢えが その地方に沿って、

そして 彼は 困窮し始めた。

15 そして 行って 彼は身を寄せた その地方の住民の一人に、

そして 彼は送った 彼を 彼の農地の中へ 豚を飼うために、

16 そして 彼は熱望していた 満腹させられることを いなご豆で

ところの 食べていた 豚が、

そして 誰も 与えなかった 彼に。

17 だが彼自身の中へ 来て 彼は言った、

『なんと多くの 私の父の雇い人が 有り余るほど持っている パンを、

だが私は 飢えて ここで 滅びる。

18 立ち上がって 私は行くだろう 私の父のもとへ

そして 私は言うだろう 彼に、

『父よ、私は罪を犯した 天の中へ そして あなたの前に、

19 もはや私はふさわしくない 呼ばれるのに あなたの息子と。

あなたはしなさい 私を あなたの雇い人の一人のように。』

20 そして 立ち上がって 彼は来た 彼自身の父のもとへ。

だがまだ 彼が 遠くに 離れていながら

見た 彼を 彼の父は

そして 彼は深く憐れんだ

そして 走って 彼がかぶさった 彼の首の上に

そして 彼は接吻した 彼に。

- 21 だが言った 息子は 彼に、
『父よ、私は罪を犯した 天の中へ』そして あなたの前に、
もはや私はふさわしくない 呼ばれるのに あなたの息子と』。
- 22 だが言った 父は 彼の僕たちに向かつて、
『急いで あなたがたは持ち出しなさい 第一の長い衣を
そして 着せなさい 彼に、
そして 与えなさい 指輪を 彼の手の中へ』そして サンドルを 足の中へ、
23 として 運びなさい 太らせた子牛を、
屠殺しなさい、
そして 食べて 私たちは楽しもう、
24 というのは 私のこの息子は 死んで いた』そして 再び生きた、
彼はいた 滅びて そして 彼は見いだされた』。
- そして 彼らは始めた 楽しむことを。
- 25 だがいた 彼の年上の息子は 畑の中に。
そして とき 来つつ 彼が近づいた 家に、
彼は聞いた 音楽を そして 踊りを、
26 として 呼び出して 下僕の一人を 尋ねていた
何で あるか これらのことは。
27 だが彼は 言った 彼に 次のことを
『あなたの兄弟が 来ている、
そして 屠殺した』 あなたの父が 太らせた子牛を、
というのには 健康である者を 彼を 彼は取り返した』。
- 28 だが彼は怒った として 彼は望まなかった 入ることを、
だが彼の父は 出てきて 側へ呼んでいた 彼を。
29 だが彼は 答えて 言った 彼の父に、
『見よ こんなに長い 年 私は仕えている あなたに
そして 決して あなたの命令を 通り過ぎなかった、
そして 私に 決して あなたは与えなかった 山羊を
ようにと 私の友人と共に 私が楽しむ。』
30 だがときに あなたのこの息子が あなたの資産を娼婦たちと共に使い尽くした者が 来た、
あなたは屠殺した 彼に 太らせた子牛を』。
- 31 だが彼は 言った 彼に、
『子よ、あなたは いつも 私と共に いる、
そして すべて私のものは あなたのものです ある。
32 だが楽しむことは として 喜ぶことは しなければならなかった、
というのには あなたのこの兄弟は 死んで いた』そして 生きた、
そして 滅びて そして 彼は見いだされた』。

〔新共同訳〕

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話させた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 ここをたち、父のところに行つて言おう。』

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25 とところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 僕は言った。『弟さんが帰つて来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30 とところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32 だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返つた。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

①構成

① 11—12 節

11 節冒頭で「だが」と直訳した語は、前に述べたことと反対のことを導入するときに使われる単語である。そこで「だが」と訳しているが、時には対立の意味を失い、「さて・すると」といった弱い意味で使うこともある。11 節の「だが」はこの弱い意味で使われているが、12 節の「だが」は「だがしかし」の意味を残しているかもしれない。父の存命中に財産分与を願うのは普通ではないからである。

② 13—16 節

この段落では「地方」が三度も繰り返される。ユダヤ人は豚を飼うことはないので、異邦の地が考えられているのかもしれない。

③ 17―19節

17節の「彼自身の中へ来て」は新共同訳では「我に返って」と訳されているが、「気づく」といった軽い意味だと思われる。苦しみの中で気づいたことは父のもとでの豊かさである。前の段落で「地方」を強調したのは、この「父のもと」と対比するためだろう。

④ 20―24節

父の喜びは20節の描写に明らかであるが、22―23節でも命令形を繰り返した後に、「食べて、楽しむ」と述べることによって表されている。また、21節で息子が父にお詫びの言葉を述べたときには、19節の最後の行が欠けている。息子は言い忘れたのではなく、父が遮ってしまったのである。ともかく、父の関心は喜びをどのように表現するかに向けられている。

⑤ 25―32節

この段落では、23節で用いられた「屠殺する」と「太らせた子牛」が二回現れる。兄は父の行動が理解できないが、32節では24節の父の言葉が繰り返されており、太らせた子牛を父が屠殺した理由に焦点が当てられている。

② 父の寛大さ（11―12節）

④ 父がまだ生きているのに、弟は財産分与を要求するが、これは当時の慣習に反することである。弟はこのような申し出によって、すでに父に背いているが、父はそれをとがめることなく、寛大に受け入れる。

③ 息子の離反（13―16節）

④ 弟は「遠い地方」へと離れて行き、その地方で財産を「まき散らし」、生きる可能性もなく「生き」、それを「使い果たして」飢饉にあい、「困窮」し始めて、その地方の住民に「身を寄せ」るが、その住民も彼には無関心で、彼は豚飼いをさせられる。父から離れたその地は「誰も彼に与えなかった」どん底の地だった。ちなみに、新共同訳が「放蕩の限り」と訳している言葉は、もともとは「生きる可能性なく・助けの見込みがなく」という意味である。

④ 苦しみの中で（17―19節）

④ どん底に落ちた彼は、自分の軽率さに気づき、「なんと多くの父の雇い人がパンを有り余るほど持っていることか、しかし私はここで、飢えて滅びようとしている」とつぶやく。この「滅びる」はルカ15章で八回も使われるアポッリユームである。父のもとにはパンが豊かにあるのに、父のもとから離れた「ここ」は死へと向かう場所である。

④ 彼はこれまで「生きる可能性もなく」生きて財産を浪費したことを後悔し、その根源がどこにあるかを知り、「父よ、私は天の中へ、そしてあなたの前に」罪を犯した、と告白する。父から離れ、父との関係を損なったことこそが罪であり、それが死を招いている。彼は「父と息子」という関わりから外れたことを認め、「雇い人の一人」のような存在だと自覚する。

⑤ 父の喜び（20―24節）

④ 息子がまだ「遠くに離れて」いたのに、父は彼を「見て」、「深く憐れんで」、そして「走って」

彼を抱きしめる。「深く憐れむ」をルカは三度用いるが（七13、一〇33）、いずれも「見て、深く憐れみ、走って（近寄って）」というように使い、それに続いて、癒しとか、死者の蘇生という慈しみの業を描いている。ここでは「彼の首の上にかぶさり、接吻した」と続くが、これは父の愛を表現している。

⑤ 息子は父に謝罪するが、父はそれを最後まで言わずに、最上の服と指輪とサンダルを僕に用意させ、宴会の準備を指示する。これは父と息子の関係が回復したことを示している。だから父は息子に「雇い人の一人のようにしてください」とは言わせなかったのである。父がそれほど喜ぶのは「死んでいた」ものが「再び生きた」からであり、「滅びていた」ものが「見いだされた」からである。

⑥ 父の視線に目を向ける（25―32節）

① 僕から「あなたの父が太らせた子牛を屠殺した」と聞いた兄は怒り、父にその言葉を向ける。僕は父が子牛を屠った理由を「あなたの兄弟を健康な状態で父は取り返した」からと述べているが、兄の目には「あなたの資産を娼婦たちと共に使い尽くした息子」としか映らない。「健康である」と直訳した語は、転義して「健全である」の意味で用いられる。ここでも「無事である」という意味以上のものが込められているかもしれない。

② 24節と32節には弟は「死んでいたが、再び生きた。滅びていたが、見いだされた」という父の言葉が繰り返されている。ここで「滅びる」と訳した語はアポツリユミであり、17節に合わせ「滅びる」と直訳しているが、この語には「失う・見失う」という意味がある。「見いだされる」との対応から考えるなら、「失われる」の意味が強いだろう。父にとって「死んでいる」とは「失われている」ことであり、「見いだされる」ことが「生きる」ことにほかならない。弟は単に体が無事であるというだけでなく、失われた状態から見いだされて、父のもとに帰るといって「健全な」生き方へと戻って来た。父の財産を使い尽くしたのではなく、父の望む生き方へと帰って来た弟へと目を向けるようにと、兄は諭されている。

⑦ 父のもとで生きる

③ アポツリユミはルカ15章4・6節では群れからはぐれた羊に、8・9節では女性が無くした銀貨に、17・24・32節では父のもとを離れていった息子に使われる。いずれの用例でも、本来あるべき所から離れてしまったものの姿を表している。15章の三つのたとえでは、「失われた」羊や銀貨や息子を見つけたときの喜びがテーマとなっている。

④ ルカ15章11節以下のたとえは「放蕩息子」のたとえと呼ばれてきたように、この息子の罪は「放蕩」にあると考えがちである。それは絶対的な「規範」を基準とし、それに外れる行為を罪と考えるからである。この見方に立てば、25節以下に登場する兄は罪のない「正しい」人になる。しかし、この兄は父の指示（規範）を守ってはいしたが、我慢して守っていたにすぎず、父との間の真の交わりには気づいていない。聖書の述べる罪は神との「関係」を破ることにほかならない。だから弟は「天の父の中へ、そしてあなたの前へ」というように、関係を表す表現を使って、罪を告白し、「息子」と呼ばれるのにふさわしくないと考える。大切なのは規範ではなく、関係である。惨めな姿であっても、そのままを父に委ねるとき、癒され、生きべきいのちを与えられる。父は息子の帰りを待ちわび、自分のもとに帰って来ることを喜ぶ。その父と共にあることが何よりも大きな喜びであることに気づくようにと呼びかけられている。